

【科目名】 ファイナンス理論	【単位数】 2 単位	【科目区分】 専門科目 展開科目
【担当者】 國方 明	【オフィス・アワー】 時間: 第 1 回授業で伝えます。 場所: 525 号室	【授業の方法】 講義
【科目の概要】 本科目では、金融経済学のうち証券や証券市場にかかわる部分をより深く学びます。 金融経済学では、ミクロ経済学とマクロ経済学の知識を使って、金融に関する最低限の理論を学びました。しかし、金融経済学は基幹科目なので、高度な知識な理論を取り上げにくい。また、金融経済学では、たった 30 回相当の授業で、ミクロ経済学の応用としての金融と、マクロ経済学の応用としての金融の両方を学ばした。このため、学びきれない知識や理論があります。例えば、金融経済学第 14 回ハンドアウトで、証券市場を取り上げました。しかし、証券市場で大きな役割を果たす証券会社については、時間の関係で省略しました。 本科目は展開科目なので、金融に対して興味・関心の強い学生に対して、金融経済学よりも高度な知識と理論を教えます。但し、本科目は全 15 回しか授業がないので、次の 3 つの議論だけを取り上げます。 ① 第 1 回、第 2 回: 金融資産が取引される証券市場に関する議論 [金融経済学第 4 回と同第 14 回の発展] ② 第 3 回～第 7 回: 金融資産の価格付けに関する議論 [金融経済学第 7 回～同第 11 回の発展] ③ 第 8 回～第 15 回: 派生商品などの議論 また、本科目の名前は「ファイナンス理論」なので、理論の紹介が中心になります。但し、理論を理解するために必要な範囲内で、現実の制度を紹介します。		
【「授業科目群」・他の科目との関連付け】・「なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか」 ＜他の科目との関連付け＞ 上記波線部の授業回数から分かる通り、本科目は「ミクロ経済学の応用としての金融経済学」の一部の回を発展させたものです。このため、ミクロ経済学、応用ミクロ経済学と統計学の知識に基づきます。 また、本科目で得た知識を、金融機関論(3 年次秋学期、展開科目)で応用する予定です。 ＜学んだことが何に結びつくか？＞ 本科目では、金融経済学よりも高度な理論と、(最低限の)制度的な知識を教えます。この結果、現実の金融市場に対する理解が深まると期待します。		
【科目の到達目標(最終目標・中間目標)】 ＜最終目標＞ ・現実の金融市場を理解できるように、金融経済学よりも高度な理論と、(最低限の)制度的な知識を身につける。 ＜中間目標＞ ・金融市場にかかわる専門的知識を身につける。 ・金融市場にかかわる制度を理解する。		
【学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫】 「ハンドアウトが見にくい」という指摘がありました。この指摘を改善するよう、次の 2 つを改善します。(1)ハンドアウトのフォントを変更します。(2)可能な限り、図表を増やし、図表の配置を変更します。		
【教科書】 本科目では教科書を使わず、ハンドアウト(俗にいうプリント)を用います。ハンドアウトは下記参考書に基づいて作成されています。		
【指定図書】 該当無し。		
【参考書】 参考書 1: 大村敬一、『ファイナンス論』、有斐閣、2010 年(新品を購入可能、本学図書館に所蔵済み) 参考書 2: 大村敬一・俊野雅司、『証券論』、有斐閣、2014 年(新品を購入可能、本学図書館に所蔵済み) 参考書 3: 岸本直樹・池田昌幸、『入門・証券投資論』、有斐閣、2019 年(新品を購入可能、本学図書館に所蔵済み)		

【前提科目】 ミクロ経済学、応用ミクロ経済学、統計学、金融経済学 私は上記科目の単位を取得していない人の履修を制限しません。但しこの人は、各科目のシラバスで指定された教科書などを自習してください。 金融経済学と本科目の関連について、【教員としてこの授業に取り組む姿勢と、皆さんへの要望】で述べています。そちらをご覧ください。	
【学修の課題、評価の方法】(テスト、レポート等) 小テスト(択一式)1回、及び、期末試験(択一式と記述式の併用)の総合評価に基づき、各履修者を評価します。小テストや期末試験以外の機会は一切ありません。また、全ての履修者を同じ基準で評価します。 第1回の授業で詳細を連絡します。	
【評価の基準及びスケール】 小テストと期末試験の総合評価に基づいて、グレードの仕切りを定めます。 A: 80%以上 B: 70%以上、80%未満 C: 60%以上、70%未満 D: 50%以上、60%未満 F: 50%未満	
【教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望】 ● 新型コロナウイルス感染拡大状況などによって、本シラバスに変更がありえます。変更が生じたら、授業内や学内掲示などで連絡します。 ● 第1回の授業で、評価方法などについて補足説明を行います。できる限り出席してください。 ● 本科目は金融経済学で教えた内容を前提として、それに補足説明を行います。つまり、本科目自体は、金融経済学ほど体系だっていません。このため、金融経済学を履修しなかった人や、金融経済学を履修してD評価またはF評価を得た人は相当苦労するでしょう。これらに該当する人は、本科目を履修するか否かを十分に考えてください。 ● 他の学生の迷惑になる行為(例: 私語や、授業にかかわる学生同士の相談を、原則として禁じます。授業にかかわる相談も、周囲の学生にとって受講の妨げになりうることを想像してください。授業中に相談事が生じたら、國方が受け付けます。	
【実務経歴】 公認会計士事務所での監査証明業務補助などの実務経験を活かし、現実の金融市場を理解できるように、金融経済学よりも高度な理論と制度的な知識を身につける授業です。	
授業スケジュール (対面授業 15回を予定しています。但し、新型コロナウイルス感染拡大状況によって、変更がありえます。変更が生じたら、授業内で連絡します。)	
第1回	テーマ(何を学ぶか): ガイダンス、証券市場と証券会社 内 容: 金融経済学第14回を復習して、証券会社の主要業務を学びます。 参考書1の第10章、参考書2の第14章。
第2回	テーマ(何を学ぶか): 株式の売買注文とその処理 内 容: 株式の売買注文の特徴を学びます。また、注文処理にかかわるルールを2つ学びます。 参考書2の第5章、参考書3の第4章。
第3回	テーマ(何を学ぶか): 株式の投資指標(単一銘柄) 内 容: 個別企業の株式のパフォーマンスを測る指標を学びます。ここでは、個別銘柄のパフォーマンスに注目しています。ポートフォリオのパフォーマンス指標を第6回で教えます。 参考書 該当無し。
第4回	テーマ(何を学ぶか): 証券の投資収益率にかかわる回帰分析 内 容: 第4回～第7回で、証券(債券と株式など)全般にかかわる理論を取り上げます。第4回では、証券の投資収益率を、データを使って分析する場合の回帰式を学びます。 参考書 該当無し。

第5回	テーマ(何を学ぶか): CAPM 内 容: 第4回で学んだ回帰式は、いくつかの理論に基づきます。その理論のうち、Capital Asset Pricing Model(CAPM、キャップエムと略します。)を学びます。 参考書1の第8章、参考書3の第9章。
第6回	テーマ(何を学ぶか): ポートフォリオのパフォーマンス指標 内 容: CAPMを応用して、ポートフォリオのパフォーマンスを測る指標を3つ学びます。 参考書1の第9章、参考書3の第9章。
第7回	テーマ(何を学ぶか): CAPMの現実への拡張 内 容: CAPMは精緻であるとともに実用性の高い理論です。しかし、非現実的とも考えられる仮定に基づきます。そこで、CAPMの仮定の一部を外した、より現実的な拡張モデルが開発されています。その拡張モデルを学びます。 参考書1の第8章、同第10章、参考書3の第9章。
第8回	テーマ(何を学ぶか): 先渡取引 内 容: 金融経済学と本科目第7回までで、証券の売買、つまり証券と代金とを交換する取引を教えました。この種類の取引を、原資産取引といいます。本科目第8回以降では、原資産取引から派生する取引を学びます。派生して生み出される商品を、派生商品またはデリバティブズといいます。 第8回では、派生商品のうち先渡取引を学びます。 参考書1の第11章第3節、参考書2の第10章。
第9回	テーマ(何を学ぶか): オプション取引①・専門用語など 内 容: 派生商品のうちオプション取引を教えます。オプション取引は、権利の売買です。売買対象の権利は、「買う権利(コール)」と「売る権利(プット)」の2種類に分かれます。したがって、オプション取引に参加する投資家の立場は、「コールを買う」、「コールを売る」、「プットを買う」、「プットを売る」の4種類に分かれます。これら立場などを学びます。 なお第9回の授業内で、小テストを実施する予定です。 参考書1の第12章、参考書2の第11章、参考書3の第6章。
第10回	テーマ(何を学ぶか): オプション取引②・コールの価格決定理論(1) 内 容: コールを売買する際の価格の決定理論のうち、一期間二項格子モデルを学びます。 参考書1の第12章、参考書3の第6章。
第11回	テーマ(何を学ぶか): オプション取引③・コールの価格決定理論(2) 内 容: 第10回で学んだ理論を、複数期間に拡張します。その際、リスク中立確率という概念を学びます。 参考書1の第12章、参考書3の第6章。
第12回	テーマ(何を学ぶか): オプション取引④・プットの価格決定理論 内 容: 第10回で学んだ理論を、プットの価格決定に応用します。その際、プット・コール・パリティという関係を利用します。 参考書1の第12章、参考書3の第6章。
第13回	テーマ(何を学ぶか): 複数取引を組み合わせた取引戦略① 内 容: 第13回と第14回で、原資産取引と派生商品を組み合わせた取引を学びます。第13回では、原資産取引とオプション取引を組み合わせた取引を学びます。 参考書2の第11章、参考書3の第6章。
第14回	テーマ(何を学ぶか): 複数取引を組み合わせた取引戦略② 内 容: 第14回では、複数のオプション取引を組み合わせた戦略を学びます。 参考書2の第11章、参考書3の第6章。
第15回	テーマ(何を学ぶか): 派生商品の機能と、投資家の取引目的 内 容: 第8回で書いたように、派生商品は原資産取引から派生する取引に過ぎません。では、派生商品は経済でどのような役割を果たしているのでしょうか？ また、投資家はどのような目的で派生商品取引するのでしょうか？ 参考書1の第11章、参考書3の第5章。
試験	期末試験(択一式と記述式の併用)を実施します。出題範囲などについては授業内で連絡します。